

グローバル・スタディにおける深い学びに到達した児童像

- ・単元ごと学習した表現をもとに自分で場に応じた正しい伝え方を考え、受け取り手がその目的を、自分が伝えた英語によって達成することができる姿

児童像の実現のために効果的だった手だて

- ・学習形態を①一人でICTを活用して考える、②友だちと協働して道案内の仕方を考える、③教師がサポートしつつ、道案内の仕方を考える。3つの方法での授業展開をし、児童自身に学習の進め方を選択させた。
- ・児童は自分に合った学習方法で授業を進め、振り返りシートは共同編集にて作成することによって、他者の意見から、自分の学習を調整することができた。
- ・単元のまとめとして、個々に選択して学習を進めた内容を基に、教室を一つの町に見立てて、友だちに道案内を行い、実際の場で道案内をすることができるか確認した。

実践の成果(○)と課題(▲)

- 学習形態を自分で選択できるようにしたことで、様々な試行錯誤が生まれた。
- ▲自力や、協働で授業を進めることにより単元のまとめができていたため、最後にクラスでまとめる必要はなかった。
⇒スタート地点とプロセスのみ伝え、どこにたどり着くかをし、別の視点からまとめをしてもよかった。
- ▲協働する相手が「気の合う児童」であり学習レベルに差があるため、進度にばらつきがでた。
⇒日ごろからよりよい教え合いの組み合わせを取り入れ、偏りなく協働学習ができるとよい。